

# 出前講座による博物館リテラシーの育成支援 -児童生徒と歴史系地域博物館に関する検討-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 全日本博物館学会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒見, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22084">http://hdl.handle.net/10291/22084</a>

【論文】

## 出前講座による博物館リテラシーの育成支援 — 児童生徒と歴史系地域博物館に関する検討 —

Aiding the Development of Museum Literacy through Off-site Lectures  
— An Examination of Schoolchildren and Local Historical Museums —

駒見 和夫\*

Kazuo KOMAMI

**Abstract:**

Although museums play a significant role in our lifelong learning society, the number of people in Japan who make use of local historical museums is on the wane, suggesting that such museums do not adequately meet society's expectations. To improve frequency of use, I believe it is effective to create opportunities in order to cultivate museum literacy and motivate museum usage. Thus, I examined the effects of holding museum lectures on local historical topics in elementary and junior high schools in the town of Goka in Ibaraki Prefecture.

As a result, I confirmed that learning programs which have clear learning objectives and make effective use of real objects as teaching materials provided opportunities to cultivate budding museum literacy by eliciting curiosity and the desire to take advantage of museums. Moreover, I have shown that local cultural assets with significant historical value can function as learning resources, even if they are relatively lacking in public awareness. As a result of these findings, I suggest that the promotion of off-site museum lectures using local cultural assets as teaching materials in municipalities without local historical museums represents a challenge for museums within our lifelong learning society.

**はじめに**

ここ30年ほどのわが国の博物館は、1980年代後半から90年代の経済拡大期に全国的に多数が開館し、その後も緩やかながら館数は増えている。日本博物館協会の統計によると、平成7(1995)年度の博物館園数は登録・相当・その他を合わせて3381館であったが(日本博物館協会1997)、平成22(2010)年度には4036館を数える(日本博物館協会2012)。このうち、館種別の郷土と

\*和洋女子大学 人文学群

原稿受理日：平成25年5月14日  
採用決定日：平成25年9月19日

歴史を合わせて歴史系地域博物館<sup>(1)</sup>という範疇でみると、その数は平成7年度が1990館、平成22年度は2353館であり、全体と同様に増えている。15年の間に全体数は1.19倍、歴史系地域博物館数でも1.18倍になっているのである。

一方、入館者数の統計をみると、全体では平成7年度が約1億7061万人（回答1999館）、平成22年度は1億4764万人（回答2313館）であり、歴史系地域博物館についても平成7年度が約4614万人（回答1179館）で、平成22年度は約4046万人（回答1387館）となっており、ともに約13%減少している。1館あたりの入館者数にすると、全体では平成7年度の8万5347人が平成22年度は6万3829人に、歴史系地域博物館では平成7年度の3万9134人が平成22年度には2万9172人であり、どちらも約25%の減少となる。つまり、博物館園全体の状況と相似の様相をなす歴史系地域博物館の設置動向と入館者数は、最近の15年間で館数が2割増加しているのに反して、入館者数は全体で12%減、1館あたりで25%もの減少なのである。この間の日本の人口動態は約2%の微増であることから、入館者数の減少は博物館利用率の明らかな低下であり、その減少率は決して小さくないものと捉えられる。

1996（平成8）年の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では、博物館などの社会教育・文化・スポーツ施設においては、地域住民の学習ニーズを的確に把握しそれに応えた学習機会の提供が求められるなど、生涯学習社会に果たすべき博物館の役割が高く期待されている。また、1990年代以降の生涯教育審議会や中央教育審議会の答申などでは博物館と学校の連携強化に関する提言が出され、両者が活動的に結びついた博学連携が唱えられるようになった。2002（平成14）年以降では小・中・高等学校に導入された“総合的な学習の時間”の取り扱いにおいて、博物館を含めた社会教育施設と連携して地域の教材や学習環境を積極的に活用することが求められ、今日に至っている。博物館利用率の減少という状況は、これらの地域社会の幅広い期待に十分に答えられていない現状を示すものであろう。

博物館利用率の向上については、地域の人びとに博物館の存在と活動を知ってもらい、彼らが博物館を活用するための能力、すなわち博物館リテラシーを育む機会を設けることが、効果的な手段になるのではないかと考えられる。そこで本稿では、歴史系地域博物館における児童生徒の博物館リテラシーの育成支援に関して、和洋女子大学文化資料館による小・中学校への博物館出前講座の実践とそこでのアンケート調査の分析を示し、博物館利用の促進と児童生徒への学習支援活動のあり方について考察を加えたい。

## 1. 出前講座の実践

### (1) 五霞町と博物館環境

上記の目的による博物館出前講座を、茨城県猿島郡五霞町教育委員会の協力を得て、町内すべての小・中学校の3校で実施した。

五霞町は茨城県の西南端に位置する。東西約4km、南北約5kmで、面積は23.09km<sup>2</sup>。約3000世帯、総人口約9500人の首都圏外縁部の小規模な町である<sup>(2)</sup>。町の北側から東側は茨城県の古河市

と猿島郡境町に接し、南は千葉県野田市、西側は埼玉県の久喜市と幸手市となる。この五霞町内には機関として活動する公立博物館が存在しない。隣接自治体では、古河市に古河歴史博物館・古河文学館・古河街角美術館、境町には歴史民俗資料館、千葉県野田市に千葉県立関宿城博物館・野田市郷土博物館、埼玉県久喜市には久喜市郷土資料館などが設置されている。五霞町は住民の主要な交通手段となっているのが自家用車であるため、町域や県境を越えて日常の生活圏が形成されており、これらの博物館の多くはその圏内に位置する。そのため、博物館は住民にとって必ずしも物理的に疎遠な存在ではないと推察される。

歴史系地域博物館についてみると、千葉県立関宿城博物館は町の境界を画する江戸川の対岸堤防上に立地しており、橋梁を渡って町域から至近の距離にある。この館は「河川とそれにかかわる産業」をテーマに、利根川水系の河川改修や水運の歴史、河川と流域の人たちとのかかわり、関宿城と関宿藩の歴史などについて、展示をはじめとした博物館活動がおこなわれている。五霞町の地勢は利根川とその水系の江戸川、中川、権現堂川に囲まれており、利根川を中心とした河川と町民生活とのかかわりは歴史的に強く、関宿城博物館の活動テーマは五霞町民にとってもきわめて関係深い内容である。また、江戸時代の五霞域は関宿藩領であった時期が長いことから関連性が強い。

しかしながら関宿城博物館の設置母体は千葉県であることから、おもに千葉県域である房総という地域視点に立って展示や活動が取り込まれており、五霞を故郷とする人たちにとっては少なからずの疎外心を感じてしまう。古河歴史博物館や野田市郷土博物館、久喜市郷土資料館についても同様で、公立の歴史系地域博物館は設置する行政自治体域を中心にした地域性の描写が目的であることから、やむを得ない状況といえよう。大きく茨城県を地域設定する水戸市の茨城県立歴史館は、五霞町から約100kmも離れている。基礎的な地方自治体に歴史系の地域博物館が設置されていないということは、当然ながら、もっとも身近な地域を主体とした歴史や生活、自然などの情報発信の舞台がないわけで、五霞町の場合、この土地を軸に置いた郷土史や生活史を学ぶことが難しい学習環境となっているのである。

ただし、五霞町には身近な郷土を学ぶ施設が皆無というわけではない。それを意図した郷土資



写真1 五霞町の郷土資料室（左：外観，右：室内）

料室が、町域中心部の中央公民館内に所在する。五霞町中央公民館は研修室や会議室などともに図書室も併設する社会教育複合施設であり、郷土資料室は 1980（昭和 55）年に開設された約 30 m<sup>2</sup>の小さな展示施設で、町内出土の考古資料と生活道具類の民俗資料が配置されている（写真 1）。郷土資料室には学芸員の配属はなく、中央公民館内に事務局を置く町の教育委員会が運営にあっており、見学希望者が窓口で申請することにより施錠を解き、無料で公開するシステムである。縄文貝塚出土の学術上貴重で特徴的な遺物も展示し、往時の生活を復元描写したパネルや図表、手書きの解説などを設置して学習への配慮も施されているが、展示以外の学習支援などの活動は実施されていない。町民の利用実態については、町教育委員会の把握によると、同じ建物内の図書室の利用者が年間約 1900 人、週平均が 35 人程度であるのに対し、郷土資料室の利用は皆無に等しいという。つまり、五霞町域の歴史や生活を伝える代表的な資料が、町民の学習資源となっていない状況なのである。

なお、五霞町の小・中学校では身近な地域を学ぶための定形的な副教材が用いられていない。きわめて小規模な行政環境もあるが、地域に存在する材料を学習資源に整えていく博物館のような機関が存在しない点も、大きく影響しているのではないかと推察される。

## (2) 出前講座の内容と方法

博物館出前講座は和洋女子大学文化資料館によって実施した。和洋女子大学文化資料館は千葉県市川市に所在する歴史系の大学博物館であり、五霞町に関する歴史資料の収蔵や地域的つながりを有するわけではないが、小・中学校への地域学習をテーマとした博物館出前講座の実践と検討を進めており、その成果をもとにして取り組んだ（駒見 2009、駒見・梅原 2011）。出前講座は五霞町立の五霞中学校、五霞西小学校、五霞東小学校において、以下のように 4 回実施した。

〈第 1 回〉五霞中学校 1 年生、2 クラス計 71 名、50 分間、2012 年 10 月 10 日。

〈第 2 回〉五霞中学校 2 年生、2 クラス計 74 名、50 分間、2012 年 10 月 10 日。

〈第 3 回〉五霞西小学校 5・6 年生、各 1 クラス計 64 名、45 分間、2012 年 11 月 14 日。

〈第 4 回〉五霞東小学校 6 年生、1 クラス計 48 名、45 分間、2012 年 11 月 14 日。

出前講座の実施にあたり、当該年度の初めに五霞町教育委員会に依頼するとともに各学校長に講座の趣旨を説明し、承諾を得た。そのうえで各学校に出向き、講座の目的と内容および方法についての相互理解を深めることに留意しながら、各校の担当教員と協議をおこない事前の準備を整えた。いずれの学校も総合的な学習の時間の扱いで、地域学習の一環として設定されることとなった。

講座の内容は身近な地域の歴史学習とし、五霞町郷土資料室の展示資料の活用を考慮して縄文時代の貝塚遺跡を焦点に据え、講座テーマを小・中学校ともに「“五霞町”の成り立ちを考えようー縄文時代の五霞ー」とした。講座のねらいは次の 3 点である。

1. 五霞町に残存する縄文時代の貝塚遺跡の分布から、往時の環境を知るとともに、現在に至る五霞の地勢的特徴について理解を深める。
2. 五霞町に所在する冬木貝塚から出土した縄文土器や土偶などの実物の遺物をさわって観

察し、意見を述べ合い、古代の生活や地域の歴史を身近に感じることができる。

### 3. 地域の歴史を調べるための博物館の役割と、その活用方法がわかる。

講座の展開は表 1 のとおりである。全体の構成は、講話（導入、展開Ⅰ、まとめ）、実物体験学習（展開Ⅱ）、ワークショップ（展開Ⅲ）で組み立てた。講座の進行は、和洋女子大学文化資料館の学芸員 2 名が中心になり、和洋女子大学学芸員課程履修学生 4 名と五霞町史編纂委員の明治大学大学院生 1 名が体験学習とワークショップをサポートし、役割を分担してチームティーチングの態勢を組んでおこなった。講話の方法については、多人数への学習効果の浸透と写真や地図資料の活用を意図してパワーポイント教材を作成し、これをもとに 2 名の学芸員による対話スタイルを進めた（写真 2）。講話学習の大筋はいずれの講座も同様としたが、学習内容の深浅や表現方法は学力水準を考慮し、小学生と中学生では対応を変えて実施した。

まず導入は、川に囲まれた低地と微高地からなる五霞町の自然や地形の確認である。水田が広がり四方を遠望できる学校周辺の写真と地形図を示し、その特徴について児童生徒から意見を聞くようにした。展開Ⅰは五霞町内の貝塚遺跡と縄文時代の基礎的な概要の解説で、町内の貝塚の紹介から縄文海進期における地勢環境を示し、教科書の関連記述も引きながら説明を加えた。町内冬木地区の住宅街の公園には縄文住居の復元施設があり、児童生徒に馴染みの深いこれを切り口として関心が高まるように考慮した。

展開Ⅱは実物資料の体験をとおした学びである。冬木 A・B 貝塚から出土した考古遺物の観察と触察による学習で、資料は五霞町郷土資料室の展示資料を使用した。冬木貝塚は 1979（昭和 54）年に五霞町冬木で発掘された縄文時代後期を中心とする汽水系貝塚で、40 棟以上の竪穴建物跡と、土器・石器・石製品・土偶・貝輪・埋葬人骨などの遺物が多数出土しており、一部が町の管理する文化財として郷土資料室に展示されている。出前講座ではこのうちの小型完形縄文土器 4 点、土偶片 4 点、貝輪 1 点を町教育委員会から借用し、一部を児童生徒の触察に充てることの手承を得ておいた。この展開Ⅱでは児童生徒を 8～15 名のグループに分けて、各グループには学芸員や大学生がファシリテーターとして指導とサポートにつき、実物資料の観察と触察をおこなった。その際、3000 年以上の時を経て遺存してきた考古資料の意義と、実物に対するさわり方や留意点を丁寧に説明し、劣化・破損の防止を図った。

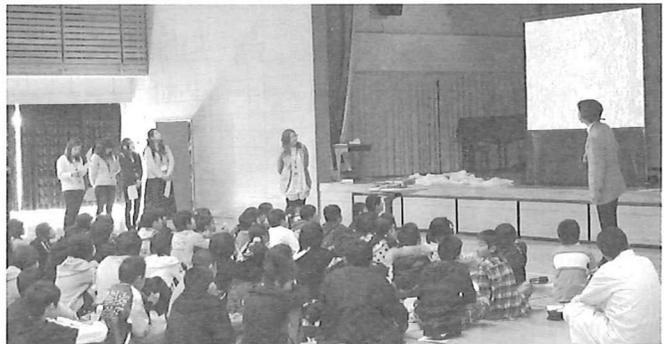


写真 2 パワーポイントを用いた解説の様子

表1 小・中学校での出前講座の展開

おもな学習内容・活動	指導上の留意点	配時
<p><b>【導入】</b></p> <p>五霞地域の地勢に関する検討</p> <p>五霞の自然や地形の特徴について考え、低地と微高地の土地であることを確認する。</p>	<p>学校周辺の土地利用の写真や地図をもとに、五霞町の自然や地形にはどのような特徴があるか、児童生徒が意見を述べるようにする。</p>	5分
<p><b>【展開Ⅰ】</b></p> <p>五霞町における貝塚遺跡の発見</p> <p>1. 貝塚公園の復元住居を糸口に、貝塚とそれが形成された縄文時代の概要を知る。</p> <p>2. 貝塚分布から、海進による奥東京湾の入江であった縄文時代の五霞周辺の地勢を理解する。</p>	<p>復元住居の写真をもとに縄文時代の概要について解説し、基礎的理解に導く。また、貝塚の分布から、海進が進んだ縄文時代の自然環境と人々の暮らしぶりを復元する。縄文時代や貝塚の知識は、教科書の内容を引いて発展させる。</p>	10分
<p><b>【展開Ⅱ】：実物体験</b></p> <p>貝塚から推理する五霞の縄文人の生活</p> <p>1. 冬木貝塚から出土した土器・土偶・貝輪の実物を見て、さらに一部をさわって観察し、古代の歴史を体験する。</p> <p>2. 貝塚からの一般的な出土遺物を理解し、自然と共生する縄文人の考え方に気づく。</p>	<p>実物資料の触察は大学生がサポートし、重さ・形状・用途・匂い・感触・模様を観点を置き、子どもたちとのコミュニケーションを重視して進める。触察では遺物の使用方法や縄文人の思いについて考えるようにし、児童生徒の気づきや意見などをワークシートに記入させる。</p>	25分 …… 20分
<p><b>【展開Ⅲ】：ワークショップ</b></p> <p>貝塚と縄文時代の再確認</p> <p>貝塚遺跡に関するクイズを出題し、学習した知識を確認し、身近な地域の古代史への興味を高める。</p>	<p>本講座で学んだ貝塚やその出土遺物に関する歴史クイズを出題し、説明を加えながら解答して理解を深めさせる。クイズの解答は教員にも参加してもらう。</p>	5分
<p><b>【まとめ】</b></p> <p>地域を学ぶ博物館の魅力</p> <p>地域の歴史を学ぶ場として、中央公民館の郷土資料室や近隣の博物館の利用方法と、その学習内容の一端にふれる。</p>	<p>中央公民館の郷土資料室と近隣の歴史系地域博物館を紹介し、その活用方法と学習スタイルの一例を示し、郷土資料室や博物館を活用して学ぶことのおもしろさを気づかせる。</p>	5分

触察にあたっては、縄文土器の重量、用途（現代の調理具や茶碗との比較）、匂い、手ざわり、模様、そして土偶の形状、重量、匂い、手触り、用途を観察点として児童生徒に投げかけ、学芸員やサポート学生との意見交換を積極的に進めるように努めた（写真3）。さらにコミュニケーション

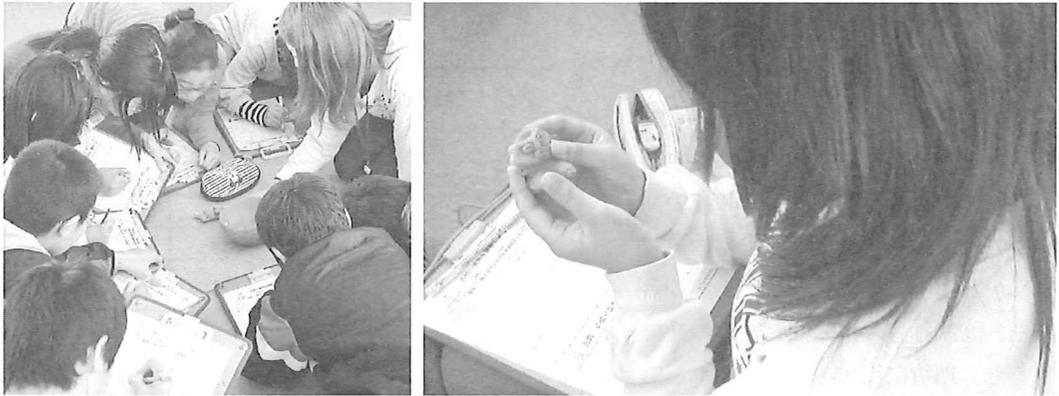


写真3 観察・触察の様子

ョンをとおり、児童生徒がそれぞれ考える場面を創出することにも留意した。また、ワークシートを準備し、触察した資料のスケッチ、感想、気づいた点、用途などに対する考えなどを記入しながら、観察と触察を進めた。

展開Ⅲは、講座での学習内容を確認して定着させるワークショップで、講話で解説した貝塚に関する簡単なクイズである。貝塚から人骨が出土する理由、冬木貝塚出土の貝輪の製作地、土偶の特徴についての計3問で、3択による解答方法とした。今後の発展学習への動機づけとなる点にも配慮し、児童生徒だけではなく教員が参加する場面も設け、全体のコミュニケーションを促進することに努めた。

そして最後のまとめは、実物資料での地域歴史学習ができる郷土資料室や近隣地域の歴史系博物館について、活用方法と学習スタイルなどの解説をおこなった。博物館学習に対する意欲づけを意図したものである。

### (3) 教員の評価と児童生徒の反応

延べ4回の出前講座では、児童生徒との直接的なコミュニケーションを重視して内容を構成した。受講者の学習意欲と充実感を高める点で一方的な教示スタイルではなく、疑問への応答やアドバイス、意見の引き出しなどを組み込んだ進行が効果を上げることを、和洋女子大学文化資料館のこれまでの実践分析で捉えられたからである(駒見・梅原 2011 p.17)。このような相互のコミュニケーションの場面を多くつくるために、進行する博物館側が6名、さらに担任や副担任などの教員にも参加を求めて、チームティーチングによって実施した。その結果いずれの講座も、児童生徒の講座学習への取り組みが全体に能動的であるように観察された。

表2は今回の出前講座に対する教員の評価アンケートの結果である。質問は5項目で、五霞東小学校と五霞中学校で実施することができた。回答者数が少なく統計的な判断は注意を要するが、③の進行方法に対する評価が小・中学校ともに高く、「評価できる」が7割以上で、上記のコミュニケーションを工夫した態勢での進行が認められたものと考えられる。一方で、予測していたイ

メージと実際の講座内容に関する①の回答では評価が分かれた。全体的には肯定的な意見が上回るが、「まったく違っていた」とした小学校教員は、他項目の回答と比較すると良い意味での期待はずれと推測されよう。中学教員では「少し違っていた」との答えが3名あり、②の学習効果の回答と合わせてみると、期待に反する学習レベルと感じた教員もいたようである。中学校では1年生と2年生にまったく同じ内容で実施したため、社会科の歴史学習の進捗と乖離する学年の教員には、教科カリキュラムの点で適合性に欠けると感じられたのかもしれない。また、講座内容の事前打ち合わせは教頭や教務担当教員との間でおこない、担任や社会科担当者とは話し合いができなかった。講座の目的と展開案は文書にして各学校へ事前に提示し、参加教員への周知をお願いしていたが、①の回答からするとそれだけでは内容が十分に伝わらなかったであろう。反省点である。

②の学習効果に関しては、小学校で高い評価であるのに対し、中学校は否定的な意見も示されている。上記の教科カリキュラムとの課題が推測される

のに加えて、実物体験の処方も一因であるように観察された。実物資料の観察と触察ではグループ分けをして、それぞれにファシリテーターとなる学芸員や大学生が付いたが、1グループの構成が全体人数の少ない東小学校では8名程度であったのに対し、中学校では14～15名と多くなってしまった。ワークシートを配布して各人が参加できるように図ったが、2点程度の資料の観察・触察であったため、手持無沙汰で意識を逸らせてしまう生徒がみられた。このような問題点も学習効果の評価に示されたものと考えられる。なお、東小学校と中学校では学年単位で講座を設定したが、西小学校では5年生と6年生の合同での実施となり、導入や展開Ⅰの講話に対する児童

表2 出前講座に対する教員の評価

① 講座内容は期待していたものと同じでしたか。			
回答	東小	中学	計
同じであった	0	2名	2名
ある程度同じであった	1名	4名	5名
少し違っていた	0	3名	3名
まったく違っていた	1名	0	1名

② 今回の講座は学習効果がありましたか。			
効果があった	2名	3名	5名
ある程度効果があった	0	5名	5名
あまり効果がなかった	0	1名	1名
効果がなかった	0	0	0

③ 講座の進め方などの実施方法は評価できますか。			
評価できる	2	6名	8名
ある程度評価できる	0	3名	3名
あまり評価できない	0	0	0
評価できない	0	0	0

④ 博物館による出前講座をまた設定したいですか。			
ぜひ設定したい	2名	2名	4名
設定したい	0	7名	7名
あまり設定したくない	0	0	0
設定したくない	0	0	0

⑤ 中央資料館の郷土資料室や周辺地域の博物館へ児童生徒を連れて行きたい、あるいは行かせたいと思いますか。			
ぜひそうしたいと思う	2名	2名	4名
そうしたいと思う	0	7名	7名
あまりそうしたいと思わない	0	0	0
そうしたいと思わない	0	0	0

の反応から学年間の修学差が強く感じられた。学年をこえた統合実施は、児童の理解度を保障する点で問題となる場合があるように思われる。

そして④と⑤の回答からは、博物館による出前講座の実施と、博物館を利用した地域学習に対する教員の比較的高い要望が看取できる。④の出前講座の設定に関しては、今回の講座で一定の学習効果を認めた反映と考えられるとともに、五霞町内に機能的な博物館のないことが願望となって表れているようにも斟酌される。公立博物館が存在しないため、実物資料の観察や体験をもとにした校内での学習プログラムについて、当該学校では設ける機会がなかったのである。⑤の博物館実地学習はこれまでも町外の施設での見学がおこなわれているが、否定的な回答がみられない点から、今回の出前講座がさらなる博物館利用の動機づけになったものと推察されよう。

また、児童生徒の反応において、教材とした冬木貝塚に対する認識がきわめて乏しいものであった。講座では展開Ⅰで貝塚について質問し、挙手による回答であるが、町内に貝塚が存在することを知る児童生徒は全体で1割程度でしかなく、とくに小学生は少なかった。さらに、町内で発掘された冬木貝塚の遺跡名称を知る児童生徒は皆無に近くなる。五霞東小学校の通学区となる冬木地区の公園にはコンクリート造りの復元住居が設置されており、その傍らには冬木貝塚と検出住居跡の説明プレートも並んでいる(写真4)。けれども、それらが遺跡を顕彰した建築物との認識は著しく希薄なのである。公園は近隣の子どもたちの遊び場となっており、復元住居の存在を半数程度の児童生徒は知っていた。ところが、大多数は公園のモニュメントとしか捉えていないようなのである。復元住居内はかなり汚れており、この施設をゴミ捨て場のようだと答える児童生徒も少なくなかった。

冬木貝塚は、古東京湾最深部に形成された貝塚で、立地や規模、検出遺構や遺物内容から、五霞地域の縄文時代の様相を伝える歴史的価値の高い文化遺産といえる。身近な地域の特色を知る効果的な学習教材に位置づくものであろう。その意義深さから復元住居や遺跡の説明プレートが設置されているのだが、少なくとも児童生徒には情報がほとんど伝わっていないとみられる。中央公民館内の郷土資料室には、出土遺物や埋葬人骨の剥ぎ取り標本なども収蔵展示されているが、先述のように見学や利用の促進が図られていないため、冬木貝塚の様相について地域住民はほとんど知らないのである。五霞町におけるこのような状況から、遺跡などの文化財を顕彰する構築物は、出土した実物資料などの情報が合わさってこそ、人びとが認識して地域の学習資源になり得るものと理解することができる。その点で今回の出前講座の実践は、知られる機会が乏しかつ



写真4 冬木貝塚の復元住居

た地域資源を児童生徒に提供した点で、一つの意義があったと思われる。

## 2. 出前講座と博物館リテラシー

### (1) 児童生徒へのアンケート調査の分析

実施した出前講座での児童生徒への学習効果と意識変化を測るため、3校の受講者全員を対象に、講座当日の事前と事後にアンケート調査を実施した。回答者数は小学5年生29名、同6年生83名、中学1年生71名、同2年生73名で、総計256名となる。選択回答方式でおこない、事前アンケートの質問内容と回答結果をグラフにしたものが図1のA～G、事後アンケートが図2のH～Mである。

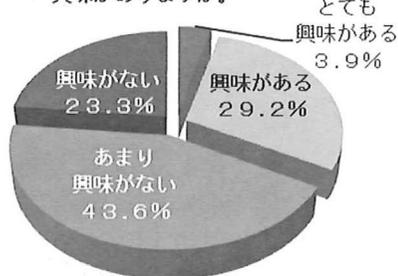
まず、出前講座の実施内容と方法に対する児童生徒の評価を確認しておく。身近な地域の歴史への興味を事前と事後に尋ねた結果が、それぞれAとJである。比較すると、「とても興味がある」の3.9%が「とても興味もてた」の23.8%へと大幅に増え、「興味がある」の29.2%も「興味もてた」の59.0%と倍増した。一方、「あまり興味がない」の回答数値の43.6%が「あまり興味もてなかった」の13.3%に、「興味がない」の23.3%も「興味もてなかった」の3.9%となり、ともに著しく低くなっている。小学生と中学生の比較では、肯定的な回答の増加率は中学生が若干高い数値であった。いずれにしろ、身近な地域の歴史学習を内容とした出前講座が、それに対する児童生徒の興味や関心を大きく引き出したと判断されよう。また、出前講座への期待度を測ったGでは、期待感をもつ「とても楽しみ」と「楽しみ」が63.6%であったのに対し、事後に出前講座の再度の受講意思を訊いたIをみると、肯定的な「思う」と「少し思う」が85.5%となり20ポイント以上増えている。これは小・中学生ともに近似の傾向であった。内容や方法について、全体的には肯定的な評価が得られたものと捉えられる。

そして、講座が理解しやすい学習であったかを質問したHでは、「とてもわかりやすかった」が半数を超え、「わかりやすかった」を加えると96.1%にのぼっており、コミュニケーションを重視した方法が効果的であったと推察される。この数値を小・中学生別でみると小学生がやや低いものであった。さらに細かく分析すると、5・6年生を合同で実施した西小学校の6年生が100%であるのに対し、5年生は82.8%であり、他の東小学校6年生97.9%、中学1年生98.6%、中学2年生95.8%と比べると、小学5年生の評価が際立って低い。先述のように合同実施では児童の反応から学年間の修学差が感じられたが、このアンケート結果も勘案すると、小学5・6年生において学年を超えて統合した学習プログラムはあまり適切ではなかったと考えられる。

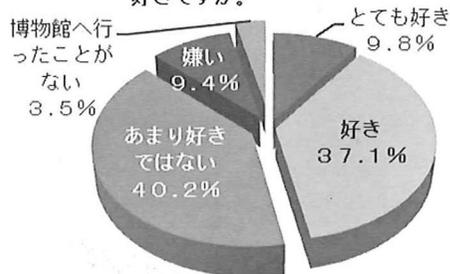
以上のように、出前講座の評価を測るA・G～Jに示された回答分析から、実施の内容と方法は若干の問題点はあったが児童生徒に概ね肯定的に受け止められ、彼らの興味と関心を高めて一定の学習効果を上げることができたのではないかと判断される。

次に、身近な地域の学習や博物館利用に関する児童生徒の意識について検討する。まず、地域の歴史に対する関心度を尋ねたAでは、「とても興味がある」と「興味がある」の肯定的な回答は33.1%、「あまり興味がない」と「興味がない」の拒否的な回答が66.9%で、両者の比率は1：

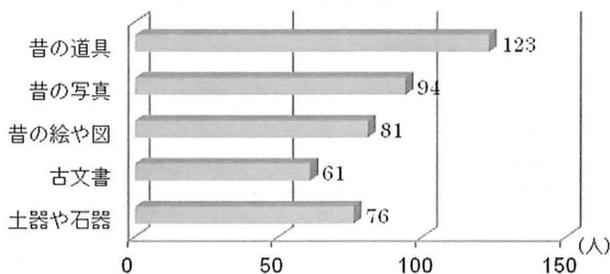
A. 自分が住んでいる地域の歴史に興味がありますか。



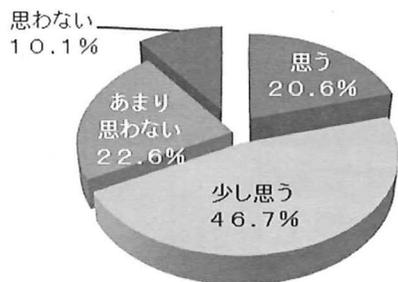
B. 博物館で歴史の展示を見るのは好きですか。



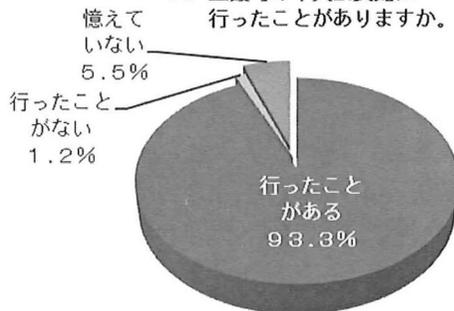
C. これまで博物館で歴史に関する展示を見て印象に残っている資料はどれですか。



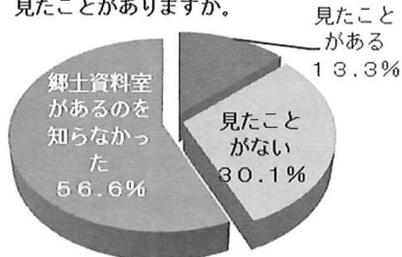
D. 身近な地域の歴史を勉強するとしたら博物館を利用してみたいと思いますか。



E. 五霞町の中央公民館に行ったことがありますか。



F. 中央公民館の郷土資料室の展示を見たことがありますか。



G. 今日の五霞町の歴史の特別学習は楽しみですか。

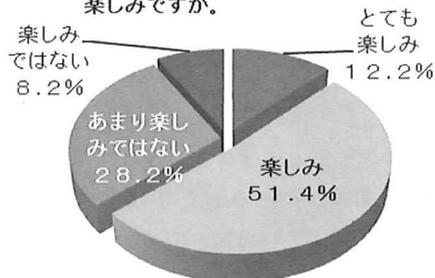


図1 児童生徒への事前アンケートの回答

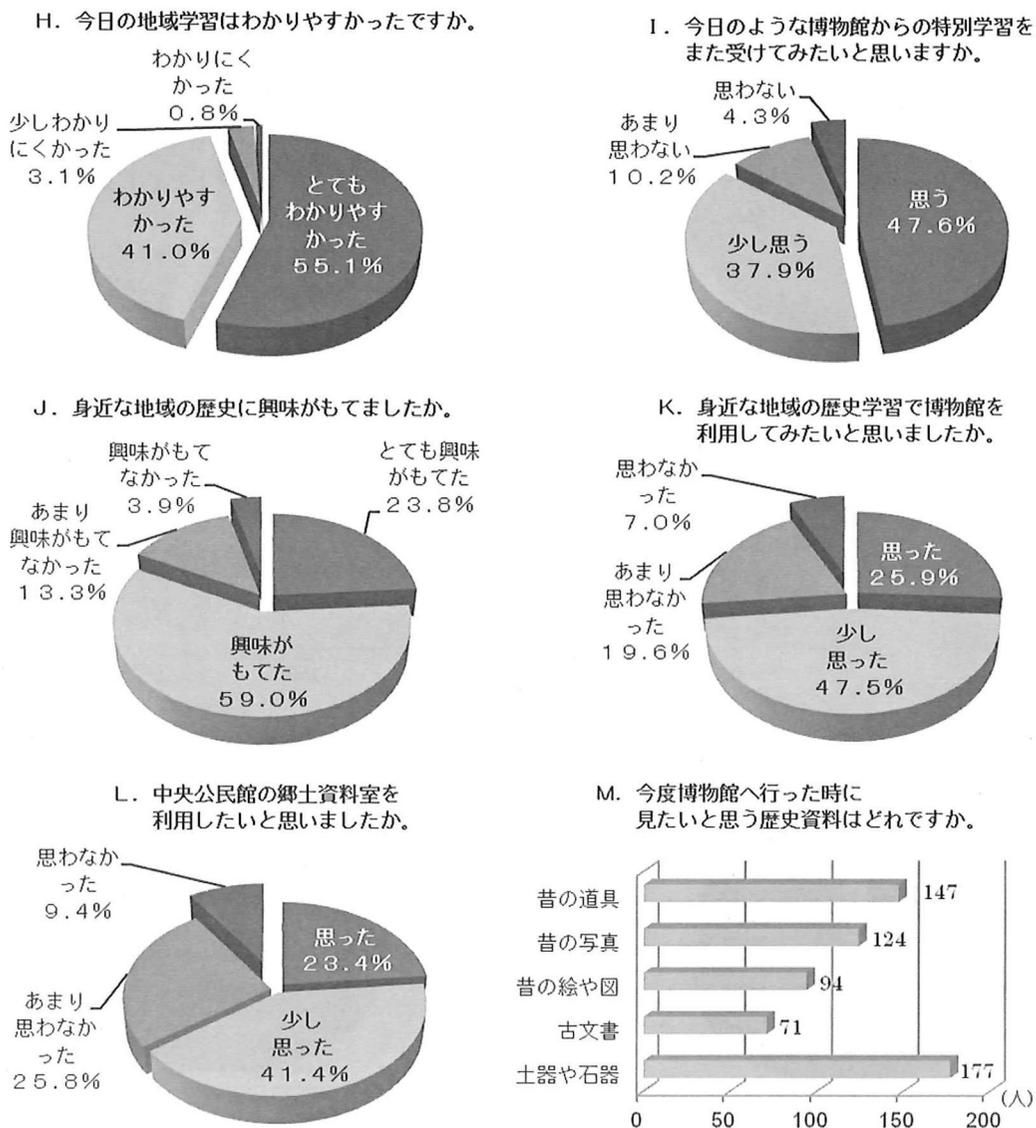


図2 児童生徒への事後アンケートの回答

2となる。小学生と中学生の比較を示すと、肯定的な答えは小学生で39.3%、中学生が28.1%で、両者に差が認められる。同様のアンケートについて、千葉県市川市西北地区の小・中学校14校の小学6年生と中学1・2年生の1624名を対象に平成18(2006)年に実施した結果では、肯定的な回答は小学生59.2%、中学生43.2%、全体で49.0%であった(駒見・伊藤・藻利 2007 pp.11-12)。つまり肯定的な回答と拒否的なものの比率は1:1となる。五霞町と市川市西北地区との調査では、いずれも肯定的な割合は小学生よりも中学生が低い共通性をもつが、両地域のその比率は大きく異なっており、比較すると五霞町における肯定的な全体回答の33.1%は、かなり低い数値と

捉えられる。

市川市西北地区には市立の歴史博物館と考古博物館、さらに地域出土の埋蔵文化財を展示する大学博物館などがあり、当該地域の歴史を学ぶための博物館環境が整っている。この地区のほとんどの小・中学校では博物館を利用した地域学習が実践されており、五霞町の学習環境と異なる点として指摘できる。身近な地域の歴史に対して五霞町の児童生徒の関心が低い背景には、このような博物館環境の影響が指摘できるのではないかと思われる。

Bは博物館の歴史展示への関心度を測る質問で、「とても好き」と「好き」が46.9%で半数に近い。小・中学生の差もほとんどないが、同じ質問を市川市西北地区に所在する市立国府台小学校6年生に実施した結果は76%であり(駒見・梅原 2011 pp.14-15)、五霞町との差はきわめて大きい。この点も地域の博物館環境との関係が作用しているように推測される。

また、Cの質問は博物館見学で印象に残っている歴史資料の選択である。項目は「昔の道具」「昔の写真」「昔の絵や図」「古文書」「土器や石器」の5種を列記し、各項目の資料を児童生徒が具体的にイメージできるように写真を添付して、複数回答を可とした。民俗資料を意図した「昔の道具」がもっとも多く、最少の「古文書」の約2倍の数であり、他の資料は近似の数値で、小・中学生とも同じ傾向を示している。

同じくこれらの項目をあげて、事後に、「今度博物館へ行った時に見たいと思う歴史資料はどれか」を尋ねた結果がMである。出前講座では縄文土器と土偶を教材にしたことから、「土器や石器」がもっとも多くなって選択者数が倍以上も増加し、他の資料の順位は小学生と中学生では若干の差は認められるが大略は変わらなかった。講座で実物観察して学んだ考古資料に児童生徒の関心がきわめて強くなったことを示している。予測されたことではあるが、出前講座の内容が博物館展示資料に対して興味を高める効果を実証的に生み出すのである。さらに、複数回答を可とした各項目の回答総数は事前が435であるのに対し、事後は613に大きく増えている。「土器や石器」に対する101名の増加が牽引となっているが、他の項目もすべて1割以上増加しており、児童生徒1人あたりの選択数が1.7から2.4へと増えているのである。出前講座の体験によって、児童生徒に博物館での展示見学の全般に対する関心や意欲が高まったことが読み取れる。

この点は、身近な地域の歴史学習での博物館利用に対する意欲の比較からも指摘できる。事前のDでは「思う」と「少し思う」で67.3%であったが、事後のKでは73.4%と増えており、とくに強い肯定の「思う」と「思った」の伸びが大きい。小・中学生別にみると、小学生は63.4%から75.9%、中学生は69.1%から71.3%への上昇であり、比較的博物館に馴染みが薄かったとみられる小学生に顕著な効果が生じているようである。

ところで、講座では五霞町中央公民館の郷土資料室に展示されている冬木貝塚出土資料を教材に用いたが、Fの回答のように、郷土資料室の展示を見たことのある児童生徒は13.3%とかなり少ない。小・中学生別では小学生が9.0%、中学生が16.6%となる。また注目されるのは、郷土資料室の存在を知らなかった児童生徒が56.6%と半数以上を占める点である。Eに示されているように、中央公民館へ行ったことのある児童生徒は93.3%と大多数を占めている。児童生徒への

聞き取りによると、図書室の利用や吹奏楽の練習、町の文化祭見学などで中央公民館を利用しているようである。先に指摘したように、郷土資料室の運営形態が児童生徒の認知度を高めていない主因と想定されるが、まずはせつかくの学習資源の存在を知ってもらう活動が必要なのである。事後に郷土資料室の利用に対する意欲を質問したLでは、64.8%が前向きな回答であった。ただし、これは小学生が72.6%であるのに対し中学生は58.7%で、15ポイント近くの差が認められる。Kの広範な博物館利用の意欲に関する回答では小学生が75.9%、中学生は71.3%で、両者は近似の高数値である。LとKを比較すると、利用に前向きな児童生徒は郷土資料室に対して64.8%、博物館に対しては73.4%であり、この差は上記のように中学生の回答に起因している。中学生には一般的な博物館に比べて著しく小規模な郷土資料室では物足りず、その利用に意欲をもてない生徒がやや多かったのかもしれない。

いずれにしても、Fに示された郷土資料室の展示を見たことのない30.1%、さらに存在さえも知らなかった56.6%の児童生徒が、出前講座での学習を経て、そのうちの7割程度は利用に意欲をもったことがわかる。目的を明確にして適切さを考慮した内容と方法の出前講座の実施が、地域の学習資源の活用に対する大きな意欲づけとなり得るのである。

なお、講座実施後3か月間における郷土資料室の申請見学者は15～20名であった<sup>(3)</sup>。多くは小学生児童のグループで、家族での見学もみられた。見学者の総数は全受講者の5～8%の割合となり、見学に意欲的な回答をした児童生徒と比べるとその9～13%にあたる。実際に展示見学にまで結びついたこの数値の評価は、基準や比較のデータがないため判断しがたい。けれども、実物資料を教材とした出前講座の実施により、活用が滞っていた地域の学習資源を、一時的にでも機能させることができたのは間違いなからう。

## (2) 博物館リテラシー育成における出前講座の意義

上記のように、五霞町の小・中学校で実施した博物館活動としての出前講座をとおして、学習の目的を明確にし、実物資料を効果的な教材となるように考慮して用いた歴史学習プログラムが、博物館をはじめとした地域の学習資源を活用する意欲や好奇心を引き出す契機となることを、あらためて確認できた。実物資料について観察の方法や観点、内在する意義や魅力などを出前講座で体得することによって、それに対する興味関心を大きく高めることが可能となる。さらに、講座での教材として観察した以外の資料にも興味関心が生まれ、それらを展示する博物館利用への意欲をも深めるのであり、このような反応は既往の博物館体験が少ない児童生徒に比較的顕著に表れるようであった。

児童生徒の博物館活用能力、すなわち博物館リテラシーは、博物館に足を運んで館内での諸体験で涵養される部分が大いであろう。来館した児童生徒がそれぞれ博物館体験を積み重ね、博物館スタッフの支援を得て身につけていくのである。その一方で、館外において博物館への関心を高めて利用の意欲づけをおこない、博物館体験や資料観察の方法の取りかかりを学ぶことは、博物館リテラシーを育む第一歩となるもので、これを目的の一つに据えた出前講座で役割を果たすことができる。博物館において意欲をもたない観察・観覧では学習や楽しみの効果が生じ難く、

---

博物館リテラシーが育つには至らないであろう。また、観察・観覧の視点や方法の知識をまったく有しない場合も同様といえる。つまり、出前講座で身につけた博物館リテラシーの萌芽が支障の少ない博物館体験をもたらし、館内での博物館リテラシーの体得を効果的に進捗させることが期待できるのである。

ところで、歴史系地域博物館の収蔵資料で多数みられる古文書資料は、一般的に人びとの関心があまり高くない。興味を強くもつ観覧者は比較的少なく、児童生徒においても他の資料と比べて関心の低いことがアンケートの回答に示されていた。歴史系地域博物館ではこのような古文書をどのような方法で展示し、観覧者に興味づけをおこなうかが課題とされるが、児童生徒の関心を引き出す点で、実物の文書資料を出前講座の教材として位置づけた学習プログラムづくりは、積極的に検討されるべきと思われる。

また、児童生徒の博物館リテラシーの育成支援は、本来、来館してもらうことが前提となる。冒頭に示したように、歴史系地域博物館の1館あたりの入館者数はこの15年間で25%も減少している。博物館体験がなければその活用能力は成長しないであろうが、リテラシーの萌芽を身に宿す機会がなければ、博物館を積極的に利用しようとする意欲は湧いてこないのである。つまり、館外において、博物館での実物資料観察の視点を教示して学びと楽しみの魅力を伝える適切な機会を設けることは、児童生徒が博物館リテラシーを獲得するスタートとなり、博物館利用の促進に結びつくものと推察できる。児童生徒の一般的な博物館利用は必ずしも自主的で意欲的な動機ではない。漠然とした態度での展示見学だけでは、博物館体験の楽しみ方などのリテラシーの涵養は難しいであろう。学校カリキュラムに位置づけられた児童生徒への出前講座に取り組み、博物館リテラシーの芽生えを目的化したプログラムの実施が効果的となる。

このように、博物館が実施する出前講座は児童生徒への博物館リテラシー育成の端緒となり、博物館活用への意欲と好奇心を高めることが期待できるのであるが、今回実践した五霞町には歴史系地域博物館が存在しておらず、これまでその機会を得られない地域であった。五霞町を中心に据えた歴史系地域博物館の活動がおこなわれないことが大きな要因となって、博物館での歴史展示見学や身近な地域の歴史に対する興味と関心が、五霞町の児童生徒に比較的低いと捉えられることは先に指摘したとおりである。地域にとって歴史的意義が大きい文化財も町民において存在や認識が広まらず、学習資源として容易に機能しない。五霞町の場合、例えば冬木貝塚の復元住居と遺跡紹介の簡単な表示板の設置だけでは、その存在でさえ人びとが捉える地域史のなかに位置づき難いものとなっている。その点で出前講座の取り組みは地域の学習資源を機能させ、身近な地域の歴史への興味関心を高める役割を果たすのである。

ところが、歴史系地域博物館の大多数は設置主体が地方自治体であり、当該自治体以外の公立学校へ出前講座を実施する例はほとんどみられない。ましてや、他の自治体が収蔵管理する文化財などの歴史資料を教材にプログラムを組んだ学習講座は、公立博物館ではまずおこなわれることがないであろう。都道府県立の博物館においては、広域下にある市区町村を対象に実施されているが、対象となる学校の数は多数にのぼり、所在地から遠い地域ではとくにその機会を得るこ

とが難しく、五霞町の小・中学校はこうした条件下に置かれている。当然ながら、地域史は現在の自治体領域を基軸に変遷してきたわけではない。その領域観にとらわれない視座が必要であるが、歴史的な諸遺産が現代の学習資源として整備・構築される場合、大方は地方自治体が単位となって当該行政域を対象に進められていく。つまり、歴史系地域博物館が設置されていない市区町村では、実物資料にもとづいて身近な地域を学習する機会が皆無に近いのであり、そのことが地域の歴史に対する関心を低くし、博物館リテラシーを身につける糸口が得られず、博物館を利用する意欲も阻む状況となっているのである。児童生徒の学習機会に生じているこの地域間格差の影響は、小さくないものと考えられる。

この五霞町と同様の博物館環境にある地域は少なくない。歴史系地域博物館が設置されている市区町村の割合を地方別に集計すると表3になる。設置率がもっとも高いのは中部地方で、もっとも低い九州・沖縄とは20ポイントの開きがある。地方間に相当の差が認められるが、全国平均にすると56.2%となる。つまり、全国1742市区町村のうち、4割以上の763市区町村では博物館を利用した身近な地域の歴史学習の機会に、ほとんど恵まれていないものと捉えられる。平成11(1999)年以降、基礎自治体の行財政基盤確立を目的として全国的に市町村合併が促進され、歴史系地域博物館の数はあまり増加してはいないが、未設置の自治体の割合は数値上低くなっている。合併での自治体の広域化によって、住民サービスの低下や旧域の伝統・文化の喪失といった問題点の指摘もある(総務省2010 pp.19-25)。その一方で、この間の合併により自治体数はほぼ半減し、行政形式上、従前には身近な歴史学習に対する体制が整っていなかった多くの地域に、その機会を生み出すこととなっている。にもかかわらず、現在でも歴史系地域博物館の設置がない43.8%という市区町村の比率は、小さい数値ではなかろう。これらの自治体のほとんどには、地域にとって歴史的意義を見いだせる文化財資料が存在するはずで、五霞町のようにそれらの収蔵展示施設を有する例も少なくないと推察される。

五霞町での実践と検討結果から指摘できるのは、このような歴史系地域博物館が存在しない地域において、身近な地域の歴史を学ぶことや博物館リテラシーの端緒を育む点で、当該地域の文化財資料を教材とした博物館出前講座を推進すべきということである。行政組織上その実施に基本的な支障がないのは都道府県立の博物館であり、歴史系地域博物館がない地域に目を配り、ミクロな地域視点に比重を置いた学習プログラムの出前講座に取り組む必要性が高いと考える。しかしながら、数の少ない都道府県立博物館で十分な対応をおこなうのは現実的にかなり難しいで

表3 歴史系地域博物館を設置する市区町村の割合

(2013年1月現在、日本博物館協会編『全国博物館総覧』ぎょうせい 参照)

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	全国
98/179	135/227	201/314	203/316	112/227	64/107	45/95	121/274	979/1742
54.7%	59.5%	63.4%	64.2%	49.3%	59.8%	47.4%	44.2%	56.2%

\* 中段：歴史系地域博物館設置の市区町村数/全市区町村数 (政令指定都市の区は含まない)

---

あろう。そこでこの実践研究のように、大学博物館においても当該視点での出前講座は有意が大きいといえる。一方、市区町村立の博物館が、他の自治体での出前講座の実施や文化財の博物館資料化をおこなうことは、行政域に責任をもつ住民サービスの点などから躊躇されよう。けれども、出前講座により博物館リテラシーを涵養して利用の意欲を高めることは、近隣地域の博物館を活用する行動を促す効果を生み、講座実施博物館の利用も促進させるはずである。前掲のアンケート回答（図2）のグラフKに表れているように、出前講座の受講後、7割を超える児童生徒が博物館利用に意欲的となった。この人たちを広く招き入れることも目的視点に据えて検討するならば、市区町村立の博物館において、設置自治体の行政域を越えて出前講座などの学習支援活動を実施する道が開けるのではないだろうか。

生涯学習社会に位置づけをもつ博物館においては、利用者のニーズに適った地域概念のもとで、関係する教育機関などと幅広く連携して取り組むことが、これからの課題ではないかと思われる。

## おわりに

本稿では、茨城県猿島郡五霞町での小・中学校へ出前講座の実践とその効果の検討から、歴史系地域博物館における児童生徒の博物館リテラシーの育成支援に関する課題を考察してきた。実践フィールドの五霞町は、全国の市区町村の約45%をも占める歴史系地域博物館の未設置自治体の一つであるが、博物館活動の視点にもとづく地域の歴史学習をテーマに実施した出前講座は、博物館環境が整っていない点などから認識度に乏しい文化財を、地域の学習資源として機能させる効果を見出すことができた。五霞町での実践成果は、同様の環境下にある自治体での取り組みに、指針の一端を提供できるものと思われる。このような地域では、博物館環境の整った自治体と比較して博物館利用に対する意欲が低いが、出前講座ではこの意欲を生み出すことが可能であった。そして、博物館での学びと楽しみを享受するための必要なヒントや観点を身につける機会を得ることが、博物館活用の意欲を一段と高揚させ、実際の来館行動に結びつく。つまり出前講座では博物館リテラシーの萌芽を意図したプログラムが求められるのである。

地域の教材を備えた学習機関の博物館と学校との連携強化が標榜されている今日では、博物館が地域社会の期待に応えるためのスタートとして、博物館利用率を高めることが取り組むべき課題となる。学校教員からは、博物館による出前講座の実施と博物館を利用した地域学習に対して、比較的高い要望が今回の実践からも看取されている。各地の博物館の数は年ごとに増加しているが、それが博物館活用を促進して利用者を拡大することには直結しない。博物館活用の意欲づけやリテラシーの芽を育む活動こそが必要ではないかと考えられる。

本研究の出前講座の実施にあたっては、五霞町教育委員会（教育長 遠乗功）ならびに五霞町立五霞中学校（校長 佐川康二）、五霞西小学校（校長 野村剛）、五霞東小学校（校長 逆井昇）の各機関からの快いご理解を賜り実践することができた。また、出前講座の企画と実践では吉田優、小野真嗣、森朋久、築地貴久、大澤則之、梅原麻梨紗の各氏に多大な協力と助言をいただき、アンケートの集計と分析において村上涼子氏の助力を得た。関係の皆さまには衷心より御礼申し上げます。

---

げる次第である。なお、本研究は平成 24 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 C）を受けた「アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究」（研究代表者：吉田優）の成果の一部となる。

## 註

- (1) 歴史系地域博物館について、本稿では、地域の歴史資料の収集、調査・研究、展示、学習支援を基本的な機能とし、地域の歴史と文化の継承や地域文化の向上などを目的として活動する、おもに地方自治体が設置した博物館を捉えて用いることとする。
- (2) 五霞町は、明治 22（1889）年に西葛飾郡内の 11 村が合併して五霞村が設けられ、平成 8（1996）年に町制を施行して現在に至る。平成 15（2003）年に埼玉県幸手市との越境合併協議会が設置されたが、成立には至らなかった。五霞町内には高等学校は所在しない。
- (3) 計画的な統計はとっておらず、中央公民館の窓口スタッフのカウントによる概算人数である。

## 参考文献

- 駒見和夫 2009 「大学博物館におけるアウトリーチ —和洋女子大学文化資料館の出前講座—」『国府台』13 号 和洋女子大学文化資料館・博物館学課程 pp.1-7、
- 駒見和夫・伊藤僚幸・藻利國恵 2007 「博物館資料の地域学習教材化に向けた基礎研究 —小・中学校の実態調査より—」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』第 11 号 日本ミュージアム・マネージメント学会 pp.9-15
- 駒見和夫・梅原麻梨紗 2011 「和洋女子大学文化資料館におけるアウトリーチの実践と検討 —小学校に向けた出前講座—」『国府台』15 号 和洋女子大学文化資料館・博物館学課程 pp.11-18。
- 総務省 2010 「『平成の合併』について」
- 日本博物館協会 1997 『博物館研究』第 32 巻第 3 号 pp.3-9
- 日本博物館協会 2012 『博物館研究』第 47 巻第 4 号 pp.19-25